



一度に多すぎる現実

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO · 11/17

彼らは私を狂っていると呼んだ。一度ならず。考えすぎたからのときもある。感じすぎたからのときもある。そしてときには、ただ違う角度からものを見ていたからだ。

時が経つうちに私は気づいた。狂気とはしばしば、分類できないものに私たちが貼るラベルなのだと。

神殿が使ったのと同じ道具だ。区分を割り当てる。ラベルを見つける。ある人間を、すでに知っているものの劣った版に変える。語は世紀とともに変わる。機能は変わらない。

それでも、過剰な感受性から生まれる種類の狂気がある。過剰な問いかけから。深みのない表面を受け入れられないことから。

狂気とは、思考が言語より速く走る部屋だ。感情が一度に到着する部屋。心が扉を閉じられない部屋。

そこを通り抜けた者は、変わらないまま出てくることはない。何かを見てしまったからだ。そして見られたものは、見なかったことにはできない。

多くの者は狂気を知性の反対だと信じている。私は納得していない。ときにそれらは近い親戚だ。ときに狂気とは、最後の限界に達した知性だ。もはや封じ込められなくなる地点。あまりに多くの結びつきを見てしまう地点。あまりに多くの意味を。あまりに多くの現実を、同時に。

そしてそうすると、言語ではもう足りない。不完全な翻訳者として残るのは身ぶり——あるいは沈黙——だけだ。

それが部屋の半分だ。外から見れば、それは過剰だ。内から見れば、まるで別のものだ。

ほとんど誰も見分けない領域がある。それは混沌と明晰のあいだにある。傷と理解のあいだに。崩壊と再生のあいだに。私はそれを明晰な狂気と呼ぶ。

そこでは結びつきが目に見えるようになる。仮面が落ちる。細部が語りはじめる。

説明するのは難しい。経験したことのない者はそれを混乱と取り違える。実際には逆だ。それは過剰な明晰さだ。一度に観察される、多すぎる現実だ。

明晰な狂気の中に生きる者は、迷ってはいない。ただ、他の者がまだ到達していない場所を旅しているだけだ。

かつて私たちは、決して期日どおりに払わない顧客を訪ねた。彼の遅れは絶えず彼を延滞先の一覧に戻した。与信管理者まで関わってきた。彼はミラノから来た。より分析的。より理性的。より情緒に乏しい。それでも顧客は耳を貸そうとしなかった。

時が過ぎた。ある日、私は彼にまた会った。私は言った。

「おめでとうございます。あなたの名前はもう延滞の一覧にありません。ついにみんなと同じになりましたね」

彼は私を見た。微笑んだ。そして答えた。「なあ君、もう一度見てくれ。私が見えなかったからといって、私がそこにいないということにはならない」

その瞬間、私はあることを理解した。明晰な狂気とは、存在しないものを見ることではない。他の誰かがよそを見ているあいだに、存在するものを見ることだ。

過剰と洞察は二つの部屋ではない。同じ一つの部屋であり、どの扉を使うかが、それにどんな名を与えるかを定める。それを狂気と呼ぶ者は外に立っている。彼らはその部屋を描写しているのではない。フォーマットを守っているのだ。そしてフォーマットは、その外で生きる者を誰ひとり赦したことがない。

Ferdinando